



第 18 号
 月 1 回 発行
 ひの心を継ぐ会
 〒799-1336
 住所: 愛媛県西条市
 上市甲 720-1

綱 領

- 一 私達は明德を明らかにします
- 一 私達は国家の鎮護となります
- 一 私達は大和世界を建設します

神道(五) (大和世界の建設)

古事記

北と一 (3)

一 八卦と洪範九疇

竹葉 秀雄

九疇洪範精数定位

前に述べた洛書の九数の定位を敷衍して、一疇界に九数を入れて、九九、八十一数の定位を観ると次の様になる。之を仔細に観想すれば、実に数の理法の正確さ円転さ玄妙さ、其の世界の莊嚴さ。神の世界の一端を窺い観る感じがして、無限の深淵に畏こむのである。

八十一数定位

31	76	13	36	81	18	29	74	11
22	40	58	27	45	63	20	38	56
67	4	49	72	9	54	65	2	47
30	75	12	32	77	14	34	79	16
21	39	57	23	41	59	25	43	61
66	3	48	68	5	50	70	7	52
35	80	17	28	73	10	33	78	15
26	44	62	19	37	55	24	42	60
71	8	53	64	1	46	69	6	51

九疇界

一	四	一	二
二	疇	一	疇
〇	界	三	界
一	三	一	七
一	疇	二	疇
七	界	三	界
一	八	一	六
三	疇	一	疇
二	界	一	界

一、神靈界は必ず大小の世界を問わず九疇(九界)に分かれて統一されている。
 二、数はそれぞれの界において定位がある。
 三、如何なる広大なる世界においても、洛書九数の順位によらねばその世界は成立しない。
 四、例えば、八十一数の世界は九疇(九神靈界)を更に九疇に拡大して、一疇の中に九疇をもつが、その時の數位は、一を第一疇界の一位におき、二を二疇界の一位、三を三疇界の一位にと置いていき、九疇界の一位に9がおかれたならば、一〇は第一疇の2位に、一一は第二疇界の2位にと、洛書九位の順序を厳然と守っていかねば世界は破滅してしまうのである。私は今八十一の数を一疇界としその九倍の七二九の數位、更に、七二九の数を一疇界としてその九倍の六五六一の數位を定めて眺観し思索しているが、その整然たる法則、莊嚴なる世界に驚嘆している。素直に法則に随えば自らに莊嚴なる世界が現成する。この六五六一の数を配列して縦横斜各合計して同数となり、各疇の数各各洛書の基本数に帰り、中心四方四偶すべて一の数をもって統括するなどことは、この洛書九位の順序を知らねば、人為にして容易にできることではない。(おそらく一生かかっても出来ないであろう)八十一の数の定位にその数をおいて観るに。

五、各疇各区の数を合計すると、洛書本位の数に復元する。例えば、第一疇第八区の64の6と4を合すれば一〇で、一と〇を加えても一に、一〇から9を除いても一に復元し、第二疇の第六区の47の4と7を合すれば一で、一と一を加えれば二、一から9数を除いても、2と、どの疇のどの区の数を取っても、

その積数が悉くその疇の洛書の本位数に還元する。言いかえれば、その積数の悉くが、洛書の本位数の変形に過ぎないと言うことになる。

六、中央の4ーが数霊の中心で、周囲に、1ー、1ー、2ー、3ー、4ー、5ー、6ー、7ー、8ーの一の霊数によって、全体を統括している。

七、1ーは一疇界の一の定位、1ーは二疇界の二の定位、2ーは三疇界の三の定位にと定まっている。

八、一疇界は縦、横、斜どちらからの合計も1ー1ー、二疇界は1ー4、三疇界は1ー7、四疇界は1ー20、五疇界は1ー23、六疇界は1ー26、七疇界は1ー29、八疇界は1ー32、九疇界は1ー35と、何れも造化三神の三をもって上る。

九、九疇界は、また、縦横斜いずれより合計するも、三六九となる。

即ち九疇の数の定位各九段、縦横斜の数の合計三六九である。

友清真歡大人は四十一は天御中主神の数霊で、三百六十九は天照大御神の数霊とする。

十、中央の疇(五疇界)の1ー23の三倍も三六九となる。

十一、九疇界の各中央の九柱の37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45の数の合計も三六九となる。

十二、中央疇界の九柱の総計も三六九となる。

十三、九疇界の各中央の数は次頁図(一)の如く、いずれより読むも一二三の順数となり、これが三元に顕現して三六九となる。

(一)図

40	45	38
39	41	43
44	37	42

(二)図

360	405	342
351	369	387
396	337	378

十四、各疇界の数合計十三の図(二)を、九で割れば、十三の図(一)の如くなり、洛書の単数に還元する。

十五、十三の図(二)の数は縦横斜列、何れより計算するも1ー0七数となる。

十六、総合計三三二一を合計すると洛書単数の九数を現す。

十七、この九数を以て、1ー0七を除すると1ー二三の順数となる。

十八、この九数をもって、三三二一を除すると、中央数の三六九を現出する。

十九、中心の4ーが4と1より成るは一霊四魂(直日霊と和魂幸魂奇魂荒魂)で、

此は荒数魂(洛書の數位、八十一の數位を和数魂と言う)の5なる数が一霊と四魂との格合から出来ているとの同意義である。(友清大人説)

二十、故に此の中心は作用を起こす原動力で、他の数と並んであずかる場合は極めて稀で、一から百までの数に於ても四十一の数は、玄極として数えない

場合がある。だから三六九の活用の場合には、三百中に於て、四十一、一四一、二四一の三数が引かれ、その比例で後の六十九に対しては一数の約四分の三が引かれるわけである。これが一年の三六五日五時四十一分四十六秒である。(友清大人説)

この八十一数の九疇九疇界にいろいろの神霊界の実相が窺われるのであるが、その法則神理は、この九疇界を一疇界とした九疇界(七三九霊数)また、その九疇界を一疇界とした九疇界(私は今六五六一数まで観ている。)と、無限に

拡大されているのである。同時にこの神理は極微の世界に向って無限に奥深く厳として存し、その法則によって天地は位し万物は創造され生成されているのである。

第二章 農の史的考察

菅原 兵治

第二節 本邦史の変遷概観

然らば此の史的法則——文質史観に従って、本邦三千年の歴史を見れば如何になるか。左に其の梗概を述べることにする。

建国

何れの国家も、其の建国の当初に於ては「質」の力が大なるべきであるは勿論であるが、我が日本国は「神ながらことあげせぬ国」といい来りしほどに、特に「質」の力の強いものがある。其の「葦牙」^{あしかび}の如き「質」の社会が次第に分化発現して来て、遂に浮文の爛熟期に達したのが、人皇以後に於ては先ず蘇我氏専横時代であろう。

蘇我時代

我が国古代制度たる氏族制度は此処に至って正しく浮文の状態に墮している。彼は其の有せる富と政治的社会的勢力とを濫用して、其の一族の富華豪華の爲には、国家の本質も敢えて顧る処は無かった。彼等が如何なる生活をなしたかは詳述するまでもあるまい。今其の二、三の事実を列挙するも、蝦夷は其の墓地を「陵」と僭称し、其の子入鹿は其の家を「宮門」、其の男女を「王子」と称し、更に自らの放縱なる生活を檢束せらるるの恐れある處から、遂に聖徳太子の王子山背大兄王子に不敬の大罪を犯し奉るさえなすに至ったのである。正しく浮文的外道ではないか。

大化改新

然かも、この浮文外道も、そが己に造化の本質より遊離せしものたる限り、決して永くは続かなかつた。やがて新しき「質」の所有者たる中大兄皇子、藤原鎌足を盟主とせる新興革新勢力によって、大胆にも至尊の御前に於て天誅を加えられ、世は忽ちにして大化改新となり、都を大和より近江に移して、世に所謂近江時代となったのである。

奈良時代

然し当時奈良を中心とする大和一帯の仏教文化に陶醉せる大官人の生活は、此の素朴な近江朝の新政に満足すべくもなかつた。天智天皇の崩御と共に都は再び大和に遷されたが、奈良朝七代は後人をして「奈良七飯七堂伽藍八重桜」と歌わせしが如く、実に仏教文化を中心とする大官人の浮文的生活への爛熟期であった。吾々は其の一つの著しい事実として、殿堂の建設に見ることが出来る。一国の政治が浮文的状态に陥ると、殿堂建設が盛に行われるに到ることは序説に於て既に述べた処であるが、此の時代に於てそれが遺憾無く現れている。やがて東大寺に盧舍那仏（奈良の大仏）が建造せらるるや、聖武天皇は群臣百僚を率い、北面して之を礼し給うたと伝えられている。かくの如きことは仏教文化の頭揚に過ぎて何時か我が国本来の国体——日本国家としての造化——から逸脱を来し易い。かくて世は仏教文化の中毒から来れる浮文的状态に向かいつつあった。この状態に付け込んで宗教的権威によって国家的権威に代らんとした迷妄非道を敢えてなすに到ったのが妖僧道鏡一派である。此処に至って仏教的浮文の状態は正しく其の極に達したものである。而してそれはやがて仏教専横の行詰りなのである。

中央は既に此の如き状態に陥っても、地方には未だ素朴な質の生活が失われなかつた。それは次の太宰少弐小野朝臣の歌によっても知り得るであろう。

先ず都の華やかさを歌つて曰く

青丹よし奈良の都は咲く花の匂うが如く今盛りなり

次に地方農村の素朴を歌つて曰く、

家があれば筍に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

当時の人々は匂うが如き花の都を永久に存続する最善最美の処と夢見ている時、何ぞ知らん、救国の原動力は、飯を椎の葉に盛る山澤に深く準備せられていたのである。桓武天皇の平安遷都は実に此の心理の上に行われたものであることに氣付かねばならぬ。

近代社会と子育て

三浦 夏南

女性は子育てを通して人間的に錬磨され母親となると言われるが、子育ては世間に考えられている以上に大変なものである。近代社会に都合の良い、中身がなく、均質的で、自立心のない社会の歯車としての個人ならばいざ知らず、行き詰る我が国を根底から変革する可能性を持った神州男児、大和撫子を生み育てんと志すならば尚更である。

妻や弟の嫁を見ていて痛切に感ずることは、子育ては決して母親一人では適切に行えないということである。一家族の家事を全うするだけでも、掃除に三食の準備と動き回れば、一日が暮れてしまう。子どもの面倒を見ることは出来ても、子どもを教育する余裕を持つことはなかなか難しいものである。素読をさせるにも一人は必ずつききりでなければならぬし、農業を手伝わせるのも、畑での危険を考慮すれば、一人は大人がついていなければならぬ。子どもの教育を丁寧に行うならば、必ず大家族を前提とし、一家の余裕を必要とするのである。三世帯で住んでいた時代が懐かしく、理想的な形態として回想されるが、祖父母、両親、子どももの三世帯では、到底間に合うものではない、戦国時代以前の一族の如き、親族一同を以て一家とする勢いでなければ、真の家庭教育は成立し得ないであろう。

現状はどうであろうか。核家族化が進むことを憂慮した時代もあったが、今では核家族ですら危うい状態はある。夫婦共働きは当たり前、子どもは一歳を待たずして保育園に預けられることすらある。さらにこれでも円満な夫婦である。子が生まれてすぐに離婚し、片親、或は親なくして生きて行かねばならぬ宿命を背負った子供も少なくないのが現実ではないか。男女共同参画、女性の社会進出の美名のもとに、戦前の三世帯家族から核家族、核家族から個人へと解体されている。個人主義とは思想の名であるが、今の日本は主義ではなく、現実に人間が個人として生まれ、個人として育っている。ここには家族の情愛の中で自然に育まれる情操はなく、倫理はなく、誇りはない。その基礎の上に積み上げられる教育、素養、嗜みなど望むべくもないのである。しかし分裂と解体が明治以後日本が走り続けて来た近代化の必然であるということを考えるものは少ない。今の社会構造では、こ

うなるより仕方がない、というよりはこうなって然るべきであり、なるべくしてなったことなのである。

保育園での育児をどうするか、小学校での教育をどうするかといった近代を前提とした議論は意味を失いつつある。そもそも家族がその基盤を失い、子どもを育てる時間と人手を持たないから、子どもを保育園、小学校へと委任するのである。本来は家族での教育があり、次に自治共同体での教育があり、最後に公共の教育があることが本末のある正しい教育である。私は高校時代、イタリアに住んでいた経験があるが、イタリアですら学校での教育は午前中の三、四時間であり、家庭教育と教会を中心とした地域コミュニティでの教育を主軸と考えている。彼等の家族愛の深さと民族的矜持の強さには逆に古き良き日本人を見せられたような気がした。経済的にはEUのお荷物かもしれないが、彼等には人として大切なものがある。本末を正すことなくして、教育の方法を如何に検討しようとも無意味である。本末が正されれば、人間は自然に育成されるものである。その為には家族を結合して一族とし、一族が自然と結合して農本自治体を形成しなければならない。血縁集団を単位とした自然共同体こそ、人を育て得る最小単位であり、この人間育成の最小単位まで還元されなければ、時間的にも、人手的にも、環境的にも十分のものとなる。最小単位という事が重要である。人体で考えても、手足、内臓等は人体の機関として一つのまとまりではあるが、人体全体を離れては機能することは出来ない。手足を切り離せば、手足は腐るよりほかないのである。この最小のラインを超えて分割することは出来ず、それを行うと最初は名残で機能しても必ず腐敗へと向かうことになる。古事記の伝えるところによれば山川草木、大自然が生まれて後に人は生まれたという。自然は親であり、人は子である。自然に奉仕して初めて人は恩恵を頂き生活することが出来る。そこで男女が結ばれ新たな命が生まれ家族となる。飲食男女は人間生活の基本であり、動かすことの出来ぬ定則である。自然と家族の結合した農本自治体こそ人間の最小単位であり、これを一度分割すれば、自治体から一族、一族から家族、家族から核家族、核家族から個人へと分裂と解体は個人の消滅まで継続することとなる。江戸時代までの日本はこの最小単位には決して分割のメスを入れることはなかった。なぜならそこが人

間生活の最小ラインだからである。ここに分割のメスを入れた明治以後の近代化は人体で言えば、手足と胴体を判ったようなもので、苦しみ悶えつつ死に到る外ない。生命を分解し、そこからエネルギーを取り出すことは容易である。明治以後の日本、とりわけ戦後経済成長に邁進した日本はこの分裂のエネルギーを使用し、進展した。しかしながら、石油や石炭などのエネルギー源を地球が生み出すには長い年月が必要であるように、我が国の力の源であったところの農本自治体の再生には長い時間がかかる。さらに分解は科学の才智でもって行うことが出来るが、結合と再生は生命のむすびを以てしか行い得ない。近代社会はその破滅の時まで常識と情性で以て進み続けるが、新たな社会の創造は独創と自主によって命がけでしか進み得ないのである。そしてこの道こそ竹葉先生、安岡先生をはじめとした昭和維新志士の残された道統であり、我々令和の皇民の進むべき道であると確信する。

とよくも農園だより

三浦 美恵

今月は、里芋の収穫・出荷、ネギの収穫・出荷、秋野菜の定植、ハウスの準備、秋野菜の定植を行いました。

まず里芋についてです。三月に定植し、長い期間お世話をしてきた里芋の収穫が今月からいよいよ始まりました。周りのベテラン農家さん達は皆、芋を掘る機械を持っており、それで掘り起こしますが、私たちは持っていません。約二千五百株の里芋を一つ一つ鍬で掘っていきます。ひの心を継ぐ会新会員の藤本さんが一緒に芋掘りをして下さるのでとても助かっていますが、一つ一つ鍬で掘るのは体力だけでなく根気の要る作業です。ようやくコンテナ一杯に詰めた里芋を自宅に持ち帰ると、今度は里芋についた根を一つ一つちぎっていきます。

まずこの作業も根切り機という機械があるので、私達は持っていないため、倉庫にテールバル台をつけて、家族でそれを囲みながら手で根をちぎっていきます。一日に平均二、三時間ずつの地道な作業ですが、他愛もない会話をしたり、子供を近くで遊ばせたりしながらできる、家族団らんの時間でもあります。機械があれば速くできますが、その分家族で協力する時間や野菜への親しみは減ってしまいます。例え理想的な農業形態でできなくとも、子供も一緒にできる農業は、数少ない仕事

と言えます。私達も自給自足ができるよう、機械化を進め、土地を増やしていくと考えるはいますが、それを急ぐあまり家族が離れ離れにならないよう慎重に選択をしていかなければならないと思っています。

続いてネギの収穫・出荷についてです。



今回の台風十七号は私達のネギの畑も大きく荒らし、残念ながら収穫間近のものはほぼ全てなぎ倒されてしまいました。倒れたネギをそのままにしておく、曲がった跡が付き、商品として出荷できなくなるため、台風翌日の朝大急ぎで収穫し、二日間夫婦共にほぼ徹夜でネギの皮をむき、出荷しました。初夏には一箱一二〇〇円だったネギは、現在五〇〇〇円にまで高騰しており、何とかして出荷したいと考えていたからです。値段の変動が激しく、また台風にも弱いネギは、今後も続けて行くか検討中です。

続いてハウスの準備です。十月にアスパラガスの苗を定植する予定で、それにおいてポンプの設置や草管理など、経験者の杏奈さんのお父さんに教えてもらいながら準備を進めています。土地購入後少しずつ準備を進めていた畑は、お休みの日毎に手伝ってくださるお義父さんのお蔭で様変わりしています。収穫できるようになる来年からは、毎日のアスパラガス収穫が三浦家の日課になりそうです。

最後は秋野菜の定植です。ジャガイモや白菜、キャベツ、ブロッコリー、カブ、大根、小松菜を少しずつ植えて行きます。今まで、たくさん育て過ぎて管理しきれないことがあったので、今回は面積を小さくし、その分一つ一つ丁寧に育てて行きたいと思っています。

今月もせわしく過ぎていこうとしています。気が付けば猛暑は去り、随分と過ごしやすいつま時期になりました。畑の草も夏草から秋草へと入れ替わりつつあり、あちこちで咲く真っ赤な彼岸花が季節の変わり目を教えてくれています。来月も里芋掘りにアスパラガスの定植、地域の秋祭りにと忙しくなりそうですが、自然からの恵みに感謝しつつ、農作業に従事できたらと思います。



★活動報告

・九月四日(水) 十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

・九月十八日(水) 十九時～二十一時 勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

★今後の予定

・十月二十三日(水) 十九時～二十一時 相談会「三間村塾再建に向けて」
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

・十月三十日(水) 十九時～二十一時 勉強会『古事記』
寺川正一さん旧宅(愛媛県松山市高井町六-三-一)

★一燈照燭 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

年会費

- ・一般会員 三千元
- ・賛助会員 一万元
- ・特別賛助会員 三万円
- ・支援会員 一万元

